巻頭言——分裂を誘う思考

小玉重夫

本号（『近代教育フォーラム』第14号）では、ドイツ観念論と現代哲学の関係をテーマとしたフォーラムと、学習論（学び論）をテーマとしたフォーラムを収録しました。さらに、新教育を扱ったシンポジウムの内容が掲載されています。すでに幾度となく繰り返し論じられてきたテーマであるようにも見えますが、従来の論じ方とは異なる切り口や視点を提起することによって、参加者のなかに様々な反応を喚起させ、その一端が本号に掲載されている諸論稿のかなにも示されているのではないかと思います。

教育学という学問は、実践や政策と近いところで営まれているために、ともすれば、人々をある程度の方向に同一化させようという志向性をもつ傾向があります。そうした傾向は近年特に、社会に対する「貢献」や「成果」が求められる大学を取りまく風潮のなかで、あるいは、国家や社会に対する同一化を求める政治状況のなかで、いっそう強まっているように思われます。

しかし、教育思想史の研究は、むしろそうした同一化志向に含まれている全体主義的傾向を察知し、それに抗して、教育に関するものの見方や実践との向き合い方をあえて分裂させることによって、多様性へと開いていくことを研究の立脚点としてきた一面もあったのではないかと思います。ルイ・アルチュセールは、1977年に行ったマキャヴェリに関する講演原稿で、「マキャヴェリの思考が彼に関心を抱くすべての人々の上に堆する、分裂させる力に注目するなら、彼の孤独を語るのではないか」と述べています（福井和美訳『マキャヴェリの孤独』藤原書店、407頁）。ここでアルチュセールがマキャヴェリの思考に見いだしている孤独は、教育思想史研究に携わる者の孤独としても、とらえ直すことができるのではないか。社会に対する「貢献」や「成果」が求められ、国家や社会に対する同一化が求められている今だからこそ、あえてそれに抗して、定型化された教育のとらえ方を問い直し、人々の間に分裂を誘う思考を紡ぎ出していくことが求められているのではないかと思います。

安易な同一化に流されることはなく、教育をめぐる議論のなかで、いかにして人々の間に分裂を誘う思考を持続させることができるか、この点に、教育思想史研究が自らの孤独を引き受けつつ、この世界で役割を果たしていく道があるのかもしれません。